

青年漁業士としての第一歩
～山の子体験漁業教室・街の子供のホームステイに取り組んで～

熊本県不知火地区漁業士会

青年漁業士 杉本 肇

1. 地域の概況

私の住む水俣市は、人口が約3万3千人で熊本県の最南端、鹿児島県との県境に位置している。三方をなだらかな丘陵に囲まれ、街に面してリアス式の美しい海岸線を有する不知火海が広がり、後方には、天草の島々を遥かに望むことができる。

2. 漁業の概況

水俣地先の海は、のり養殖、採貝、底曳き網、魚類養殖漁業等多様の漁業が行われている不知火海の南部に位置し、東シナ海からの外洋水の影響も受けて、豊富な魚種が棲息している。

私の所属する水俣市漁協では、これらの魚介類を対象として、いわし船曳網、刺網、たこつぼ漁業、延縄、一本釣り漁業が営まれている。

3. 研究グループの組織と運営

熊本県は、平成元年から漁業士を認定しているが、熊本県不知火地区漁業士会は、不知火海で漁業を営む20名の漁業士により、平成7年9月に結成された。

役員は、会長、副会長、会計各1名、監事2名の5名で、有明地区と天草地区の他の2つの漁業士会とともに、のり養殖分科会、漁船漁業分科会、魚類養殖分科会を構成して活動している。

4. 研究・実践活動課題の選定の動機

不知火地区漁業士会では、先進地視察、有明・天草地区漁業士会との合同研修などに定期的に参加しているが、日頃から「漁業士の活動はどうあるべきか」、「漁業士の存在を認識してもらうにはどうするべきか」など常に話題にしてきた。

漁業士のほとんどは子供を持つ30代、40代であり、役員の中には、学校のPTA会長を務める者もあり、会の役員会や行事の集まりの中で、同年代の子供の事がよく話題になった。平成8年度の役員会で、子供を対象とした行事を行ってみてはどうかという意見がでた。また、子供達が魚を食べる機会が少なくなった昨今、取れたての新鮮な魚介類を食べれば、将来、魚の消費拡大につながるのではないかと話し合いも弾み、まずはメンバーの魚類養殖漁業で体験教室を実施することになった。

5. 研究・活動の状況及び成果

平成8年8月に、初めて小学生の体験漁業教室を開催するにあたり、私達は「会の運営、行事の企画と実行の知識を得ること」、「子供達に漁業の楽しさ、新鮮な魚介類のおいしさを伝えること」また「広く水産関係者に漁業士会を知ってもらうこと」という3つの目標を心に抱き、会長、監事が中心になって企画を行った。

体験漁業教室で子供達は、沖合約1km先に設置されたトラフグやマダイの養殖場で初めて投餌の体験をし、勢い良く摂餌する魚に歓喜した。その後、魚種などを当てるお魚クイズを行い、待望の海の幸バーベキューでは「漁業ってこんなにおいしい思いができるの」と大喜びで舌鼓を打っていた。しかし、いろんな事をすばやく吸収する子供達にとっては、少し物足りないように見受けられたので、体験漁業の種類を増やす事など、次回への貴重な検討材料が得られた。

第2回目の体験教室は、平成9年8月に開催したが、地曳き網を行い、マダイの稚魚、キス、アカエイ等が捕れた。このアカエイが子供を産み始めたので、またとない貴重な体験を提供出来た。「驚きの声をあげる者、目を見開いてじっとたたずむ者」参加した子供達の驚きと歓喜の姿にこの体験教室から生命のもつ力強さ、意義の深さを少しでも伝えることができたと自負している。

この体験教室の様子は、熊本日新聞芦北支局が取材し、翌朝の新聞に掲載された。

更に、9年度には、ホームステイを行ったが、日頃、海や漁業に接する機会が少ない街の子供達を漁業士宅にホームステイさせ、漁村の生活を体験して、自然のすばらしさや漁業に対する理解を深めてもらうことを目的に企画した。

平成9年7月29日から8月1日までの3泊4日の日程で、熊本県宇土市宇土小学校5年生の8名（女子5名、男子3名）を受け入れ、打瀬網・釣り・イワシ機船船曳網漁船に乗船し、それぞれの漁業の体験、海水浴とバーベキューで漁業士の家族や地元の子供達との交流、水俣市環境センター・水俣病資料館などでの勉強会など、今度は、盛り沢山の企画であった。

ホームステイの取り組みは漁業士会としても初めての事であり、受入体制等の日程調整、長靴、カップ、ライフジャケットの準備、障害保険の加入等々、日頃、寡黙で事務的処理が苦手な私達の頭はパニックになったが、学校や両親との連絡体制の整備など何度となく打合せをする中で漁業士の間での交流が生まれ、親密感が深まった。

3泊4日という長い日程に子供達や御両親にも、やや不安があったと思ったが、いざやってみると、あっという間の4日間で、参加した子供達も、元気に盛り沢山の行事に取り組んでくれた。

特に一本釣りは好評で、漁師顔負けに立て続けにカサゴやベラなど、5匹、6匹と釣り上げる子供がいて、漁師にならないかという漁業士からのスカウトの声が掛かり、一時的ではあるが「まんざら」でもない顔で「将来は海で」と応え、子供達は釣りの楽しさを満喫したようである。

私は、最終日3日目を担当したが、朝4時半の起床時間には誰も目覚める者はおらず、いわし船曳網船に乗り込むのも彼らは疲れ果てて夢の中、「小学生に、早朝からの操業を体験させるには無理があった。」と私の反省にも、彼らは「生まれて初めて船の上で眠った。」との喜びの方が勝っていた様子だった。

一連の体験漁業教室、ホームステイの活動を通して、我々の持つ職場は、おおらかで、豊かな教育の現場であることを教えられた。

6. 波及効果

不知火地区漁業士会は発足してから日が浅いが、これまでの活動を通して得たことは次のとおりである。

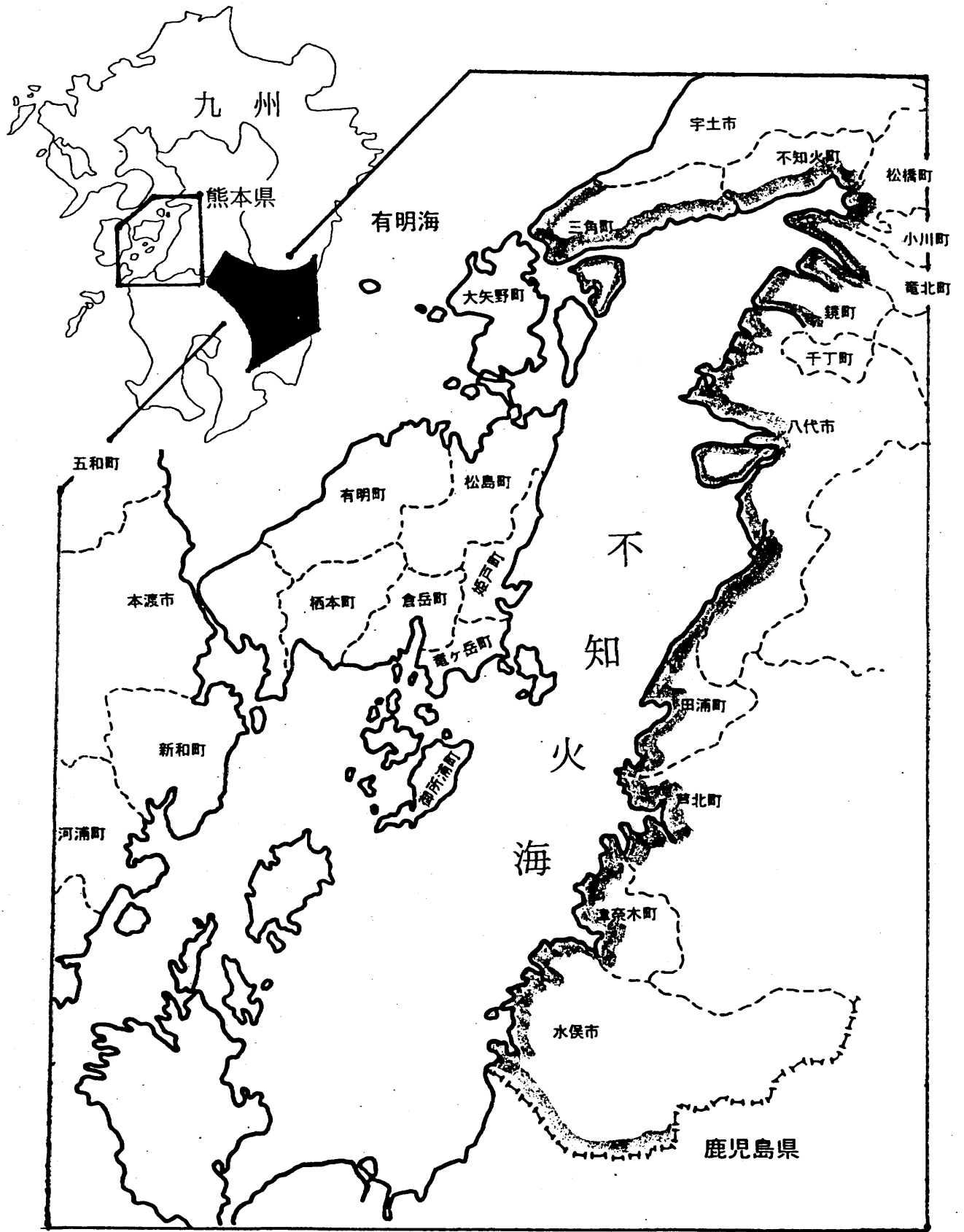
- ・ 体験漁業教室・ホームステイの活動を通じて子供達や子供達の両親と交流ができ、漁業・漁家や魚食についてイメージを変えるチャンスが作れた。
- ・ 今年度の体験漁業教室では広報（熊本日日新聞・読売新聞）の報道等もあって、11年度以降に、すでに2件の申し込みを受けており、活動を継続する糸口が出来た。
- ・ 漁業士の住む市町の水産担当課等に漁業士会の活動に関する認識が深まり、活動費の助成を受けられるようになり、また、県の魚食普及協議会等の活動助成金の支援を受けて漁業士会の活動の幅がひろくなった。
- ・ 漁業士の中に、情報交換・交流の機会が増えフランクに話し合えるようになり、相互理解が生まれ、漁場のゴミの持ち帰り運動など漁業に携わる者の共通したテーマでも広範囲に運動を展開する糸口が見えてきた。
- ・ 失敗や結果を恐れなくて地域、漁業の発展のために活動するというチャレンジ精神・自覚が漁業士に生まれ、活動を継続することにより、次の課題と展望が開けることが分かり、「継続は力」と思えるようになった。

7. 今後の計画と問題点

これからの活動の課題は、今年度から漁業士によるゴミの持ち帰り運動を展開しているところであるが、漁業に携わる者の共通したテーマで、各地域の青年漁業者と共に活動を展開することである。

私は、漁師になって6年目の新米の漁師であるが、漁業士会活動で学んだ「一步前進」の心をもって、微力であるが、これからも活動にチャレンジして行きたい。

位置図



漁業士実践活動

体験教室

目的

漁村の子供を招いての漁業体験教室と海鮮バーベキュー大会
漁作業の見学や魚介類の料理などについて、漁業士が講習し漁村の子供に漁業に関する知見を身につけてもらうことを目的とする。

概要

日時 平成8年8月23日

場所 津奈木漁業協同組合

対象者 津奈木町立平国小学校5、6年生全員

出席者

福田 三継 (不知火地区漁業士会 会長)

山科 文雄 (不知火地区漁業士会 監事)

矢野 鉄治 (不知火地区漁業士会 会員)

速山 正治 (不知火地区漁業士会 会員)

教室内容

- ・養殖漁業の見学(マダイ、トラフグ)
- ・魚に関するクイズ大会
- ・海鮮バーベキュー大会 等

